

■学位論文要旨（修士）

地域行事からみた 地域社会

—静岡県周智郡森町一宮地区の 秋祭りを事例として—

土 屋 聡 美*

本論文は、静岡県周智郡森町一宮地区の秋の祭典について、とくに片瀬町内会（八面社）の事例を用いて、その変遷、転機となる要因、現在の姿を、昭和40年から50年の統計、森町史などの諸資料と、聞き取り調査をもとにみていくものである。

I 章では、調査地区概況として一宮地区と一宮地区を含む森町の特徴をみた。

森町は1955年に一宮村他4町村が合併して成立した。南北で標高差が激しく、北部は豊かな山、南部は田園地帯と自然豊かな土地柄である。人口20,273人、世帯数6,004（2005年度国勢調査）、市街地への人口の集中と北部山間地域の人口の流出が見られる。一宮地区は森町の南西部に位置し、周囲を山に囲まれた小盆地のような地形となっており、農業が盛んである。人口1,905人、世帯数501で、袋井市、磐田市と接していることから近隣工業のベッドタウンとしての役割も果たしている。

II 章では、一宮地区祭典概要として一宮地区の祭典の現在の様子を2007年度祭典の体験、観察をもとに見ていく。一宮地区祭典は、体育の日がある3連休の土・日曜日の二日間にわたって行われる。二輪屋台の町内引き回しを主に、氏神社の祭典、連合が行われる。町内会は祭典時には「社」と呼ばれる組織になり、実行委員など役員には町内会長やその他町内組織の役職者が就く。実際の準備や当日の運行は、町内の40歳までの男性と町外居住者でも彼らが認めた男性による組織「青年会」が担う。観光などの見物人はいないが住民の参加型の祭典で、青年会を中心に子どもから

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創成専攻

大人、老人まで、全住民が参加する祭典である。

一宮地区では旧来から神社祭典が行われていたが、1975年前後に大きく変化し、屋台の引き回しが行われるようになった。

Ⅲ章では一宮地区祭典の変化について、まず統計データと町史から当時の森町、一宮地区の様子を明らかにする。そして「森の祭り」の影響から考察する。

森町、一宮地区とも人口は39歳以下の人口が減少、40歳以上の人口が増加し、全体的には減少傾向にある。とくに15歳未満の人口の減少が著しい。しかし15歳から39歳の人口の構成比の推移において森町と一宮は異なり、森町は縮小し、一宮地区では増大した。これには、森町の農林業政策とそれに伴う就業構造の変化が関わっている。自立経営農家の育成を目的とし「農業労働力調整協議会」が置かれたが、その実は自立経営農家以外の農家と農民を都市工業労働力ないしは農村に進出する工業の補完的労働力として再構成することにあった。工業資本家もそこに目をつけ、また工業立地の良さもあり、静岡県中遠地域は工場の進出ラッシュを迎えた。こうして静岡県をはじめ森町、一宮地区では兼業化が進み、第一次産業従事者の第二次産業への流出がみられ、農業県から工業県へとシフトした。一宮地区の場合、1970年は依然として第一次産業従事者が637人54.7%と半数を占めるが、1965年からは-11.2ポイント減少、一方第二次産業従事者は29.7ポイント増加し、24.4%になった。農家数も専業・一種兼業農家が大

幅に減少し、第二種兼業農家が増加している。

一宮地区は、大規模工場がある袋井市、磐田市と接していて就労先が見つかりやすく、第一次産業から第二次産業へとシフトしやすかった。これにより15歳から39歳の人口流出が抑えられたと考えられる。

これらに加えて、「森の祭り」というお手本が屋台建造のきっかけになった。「森の祭り」は、11月の1日から3日にかけて森町森地区で行われている祭典である。屋台引き回し、舞児還し、神輿巡行などが行われる。屋台引き回しは江戸中期にはほぼ現在と同じように行われており、その後昭和49年の大改革を経て現在の姿になった。「森の祭り」と一宮地区祭典の共通点は屋台の形状、お囃子、「社」や大当番という呼び名、運営組織などで、相違点は舞児還しや神輿の巡行が行われていないこと、共通の神社ではなく各氏神社の祭典をそれぞれの町内会で行っていることなどである。これらから、一宮地区祭典は「森の祭り」の屋台引き回しの部分だけを旧来の氏神者祭典に取り込んだものといえる。昭和30年の森町合併時の理由にあるように、商業都市であった森町と一宮地区の間には古くから往来があり、また親戚や知人がいることで参加、見学していた。これらから森の祭りへの憧れは強く、とくに青年たちにとって勇壮な屋台引き回しは魅力的で、一宮地区祭典でも屋台を建造し引き回そうという機運につながった。

こうして、就業状況の変化によって青年層が他出せず町内にとどまるとともに、周辺地

域の情報を得やすくなったこと、そして「森の祭り」の影響を受け一宮地区祭典は大きく変化した。

最後にⅣ章では、『片瀬町内会屋台作り趣意書』（昭和50年12月）から一宮地区祭典での屋台引き回しの持つ意義について考察する。趣意書に「一層の住民相互の和を培うことを願」い、「町内子供達の健全な成長と青年諸氏の郷土愛が益々深まることを期待」するとあるように、当初から屋台建造の目的は町内会の発展と団結力を高めること、町内会への愛着にあった。同時期に一宮地区内5町内で屋台建造が始められたことから対抗意識もあったと思われる。このように、もともとは氏神社の祭典で宗教行事として行われていたところに屋台引き回しが入り入れられたのであるが、その目的は宗教的というよりも、地域社会のまとまりを求めるものだった。

本論文では、一宮地区祭典の変革の経緯やそれらを促した環境について述べてきた。このようにしてできた祭典は、祭典の本来の姿である宗教行事とは違う、地域社会のつながりという役割を果たしている。森町、一宮地区ともに人口の減少や高齢化が懸念されている。祭典運営を含め町内活動などの面で厳しくなることが予想されるが、祭典が持つ新たな意味、力を活かして地域の衰退を防ぎ、祭典が継続されていくことを希望する。